四季雑感

イノベーションの芽を摘むのは誰か？

Who is nipping innovation in the bud?

安田　陽 *

しばらく前に，ネットやソーシャルネットワーク（SNS）で小学生がランドセルをキャリー化する発明をしてそれが炎上した事件がありました（正確には小学生の発明を上から目線で批判した大人たちへの再批判）．この経緯については例えば4月25日付のダイヤモンドオンラインの記事（https://diamond.jp/articles/-/304473）でうまくまとめられていますが，そこでは「イノベーションの芽をつぶす人たちの3つのロジック」として，

(1) 自分たちに都合のいいリスクを設定してそれを過度にあおる
(2) 古いシステムのメリットを過度に強調する
(3) 社会課題をちゃぶ台返しする（とにもかくにも，つぶしたい．新しい取り組みなど認められない．結論ありき）

が挙げられています．

一般に新しい方法が提案されると，その方法を採用したことで発生するリスクも当然議論しなければなりません．しかし，そもそも新しい方法のリスクばかりを強調し，それを採用することによるメリット（便益）を全く評価しなかったり，新しい方法を採用しない（現状を継続する）ことによるリスクを無視していては，フェアな議論とは言えません．上記の（1）や（2）は，このようなアンフェアでダブルスタンダードな思考方法から容易に発生します．

また，（3）のちゃぶ台返しは上掲記事では「意図的なのか単なる無知なのか，そもそも大前提となっている事実を否定して，イノベーションそのものの価値をおとしめる」と説明されています．書かれてあることを字義通り読まずに書かれていないことを論理飛躍で恣意的解釈すると事実の歪曲や認知の歪みにつながりがちです．

筆者は再生可能エネルギーの系統連系問題についてここ数年SNSで発信を続けており，特に国際エネルギー機関（IEA）や国際再生可能エネルギー機関（IRENA）などで議論されている国際動向を紹介していますが，その際前述の（1）～（3）にそのまま該当するようなご批判（というより罵詈雑言）をよく頂きます．まさに「自分たちに都合のいいリスクを設定してそれを過度にあおる」「古いシステムのメリットを過度に強調する」といった典型パターンも多く，大前提となる事実（例えば国際機関報告書の内容）を根拠なく無視・否定するものも少なくありません．そのようなご意見は，それなりに専門用語も駆使し電力技術者であることを示唆するアカウント（いわゆる電垢）からも見られます．

特に再生可能エネルギー，とりわけ太陽光や風力は，天候に依存して変動することや従来型電源に比較して効率が低いことから，劣った技術と見られやすく，その偏見は特に高度な知識や経験を身につけた従来型技術者集団において発生しがちです．ここにエンジニア自身がイノベーションの芽を摘む構図が生まれやすくなります．

イノベーション理論の祖とも言われるシュンペーターまで遡ると，イノベーション（『経済発展の理論』の表現によると「新結合」）は「新しい生産方法」といった技術論だけでなく「新しい販路の獲得」や「新しい組織の実現」など，しくみや社会制度の改革も包含します．クリステンセンは名著『イノベーションのジレンマ』において新技術を持続的技術と破壊的技術に分けましたが，破壊的技術は一見劣った技術に見え，持続的技術を好む層からは軽視されやすい（そしてその威力に気がついた時は手遅れ）ということを多くの例証を元に整理しました．ここで破壊的技術の優良事例の多くは1980年代の日本企業だったということは重要です．

翻って今の日本では，イノベーションと言えば技術革新ばかりで，技術革新と言えば持続的技術のみであるかのような壮大な勘違いがエンジニアを含む多くの人を覆っています．「イノベーションの目を摘む大人たち」の言説は特に匿名性の高いSNSで蔓延っていますが，実社会においても部下のアイディアの芽を摘む頭の固い上司も多いのではないでしょうか．「科学技術立国ニッポン」において再エネがなかなか進まない一つの理由は，こういったドラスティックな変化を恐れる大人が増えてきているからかもしれません．

* 京都大学特任教授